

イタリア学会  
第71回大会 プログラム

2023年11月4日(土)

大阪大学  
(箕面キャンパス)

会場 大阪大学 箕面キャンパス  
外国語学研究講義棟 501 教室

◆ 開催校挨拶 10:15～10:30

◆ 研究発表 I

10:30-11:00

1. 18 世紀公証人記録群から明らかになったナポリ・フィオレンティーニ劇場  
——興行師、レパートリー、観客、そして 1778 年改装時の  
内部図面より——  
発表者：山田高誌（熊本大学） 司会：近藤直樹（京都外国語大学）

◆ 休憩 11:00～11:05

11:05-11:35

2. Come lavorava l'ultimo Montale. Autografi, varianti e qualche sorpresa  
発表者 DURETTO, Ida（京都大学）  
司会：土肥秀行（東京大学）

◆ 休憩 11:35～11:40

11:40-12:10

3. ロレンツォ・デ・メディチにおける「人間的観想」と「神の観想」  
——『我がソネットへの注釈』 *Comento de' miei sonetti* 第 21 歌の解釈を  
めぐって——  
発表者：林花菜子（京都大学） 司会：根占猷一

◆ 休憩 12:10～13:30

◆ 総会 13:30～14:55

◆ 研究発表 II

15:00-15:30

4. 「スペイン人礼拝堂」再考：14 世紀イタリア美術の改悛、救済と復活の諸相  
発表者：坂口万津子（慶應義塾大学）  
司会：喜多村明里（兵庫教育大学）

◆ 休憩 15:30～15:35

15:35-16:05

5. アンナ・クリショフと女性選挙権

発表者：生木新菜（早稲田大学） 司会：勝田由美（工学院大学）

◆ 休憩 16:05～16:10

16:10-16:40

6. イタリア語文法記述における統語と意味：「文」をめぐって

発表者：土肥 篤（東京外国語大学）

司会：鈴木信五

◆ 休憩 16:40～16:45

16:45-17:15

7. Il manoscritto Vat. Lat. 8853 della Biblioteca Apostolica Vaticana: i sonetti 'persiani' di un 'mercante fiorentino' di fine Cinquecento

発表者：AMATO, Lorenzo（東京大学）

司会：水野留規（愛知県立芸術大学）

◆ 懇親会 18:00～20:00

会場：Lei can ting（リー・ツァン・ティン）

# 18 世紀公証人記録群から明らかになった ナポリ・フィオレンティーニ劇場 ——興行師、レパートリー、観客、そして 1778 年改装時の 内部図面より——

山田高誌（熊本大学）

1618 年創建、ナポリ最古の民間劇場のフィオレンティーニ劇場は、1709 年より“喜劇オペラ *commedia per musica*”の定期上演を全欧に先駆け開始し、ペルゴレージ（1710-36）、ピッチンニ（1728-1800）、チマローザ（1749-1801）、ロッシーニ（1792-1868）らの活躍の場として 18、19 世紀の西洋音楽史、演劇史に大きな影響を与えた。しかし 1941 年の爆撃により劇場は破壊され、さらに 1943 年のドイツによるナポリ爆撃によって公文書館も被害を受け、同劇場経営史料の大半は散逸し、その実証研究は戦前のベネデット・クローチェの『ナポリの諸劇場』（1891/rev.1915）研究以降、極めて限られたものしか行われてこなかった。

21 世紀に入ると、失われた劇場史料のバックアップとなる情報が、ナポリ銀行歴史文書館に所蔵される換金文書群の中に見出されることが報告され、地元の研究者 Paologiovanni Maione（現ナポリ音楽院教授）らを中心にさまざまな研究がなされるようになってきたが、発表者はさらにそこから“支払い契約”の大本の“取り決め文書”原本を収める「公証人文書」に着目することで、劇場史の再構築の可能性を提起してきた。

公証人文書は、これまで法務省所管のナポリ公証人史料館に保管され、長らく一般のアクセスが制限されていたが、2016～18 年にかけて国立ナポリ公文書館 Archivio di Stato di Napoli へ全面移管され、さらに 2017 年の国立公文書館での写真撮影を個人の自由とする新法案の施行によりようやく具体的な調査が可能となったばかりである。

発表者は、2018 年度より特に劇場関連の契約を行っていた数人の公証人史料（Gaetano Manduca, Nunziante Abbate など）を重点的に調査することで、これまで 18 世紀後半の民間劇場の運営に関しての多くの初出の記録およそ 400 点近くを発掘しており、これによってフィオレンティーニ劇場ともう一つの主要民間劇場ヌオーヴォ劇場の活動をはじめ“面”として明らかにする準備が整ってきた。

本発表では、その発掘調査の成果報告の一部として、フィオレンティーニ劇場の1760年代から90年代にかけ、目まぐるしく入れ替わった興行師を時系列順に明らかにし、上演作品群を同定し、劇場運営方法の詳細や、衣装や照明、観客名といった劇場空間に関わる情報と共に、このたび新たに発見され、フィオレンティーニ劇場としては初の「内部図」となる1778年のリフォーム工事完了の折に作成された図面を提示しながら、同劇場の“実体”を多角的に明らかにしていく。

## Come lavorava l'ultimo Montale. Autografi, varianti e qualche sorpresa

DURETTO, Ida (京都大学)

Pubblicati per la prima volta nel 1980, a conclusione del volume dell'edizione critica di tutte le poesie di Eugenio Montale, gli *Altri versi* sono il frutto della proficua collaborazione tra l'autore vivente e i curatori della sua opera, Gianfranco Contini e Rosanna Bettarini: un nuovo libro, nutrito però della profonda riflessione sulle raccolte già edite, dagli *Ossi di seppia* al *Quaderno di quattro anni*. La partecipazione dei curatori all'allestimento degli *Altri versi* non deve fare pensare a una minore consapevolezza da parte di Montale, che non solo riprende a scrivere, ma esercita anche un attento controllo sulla struttura della raccolta, fornendo precise indicazioni per la collocazione delle liriche. Queste scelte, meditate e discusse, attestano l'interesse dell'autore verso quello che egli stesso definisce «qualcosa che è a mezza strada tra un commento ai libri precedenti e un libro nuovo», e che considera l'ultimo, decisivo, capitolo del suo canzoniere.

La novità del settimo libro è evidente a livello tanto tematico quanto stilistico: l'anziano poeta diviene fenice in grado di rinascere dalle ceneri. Un'immagine che può forse sorprendere, lontana com'è dall'orizzonte di attesa legato alla produzione senile: scrittore al tramonto, abbandonato dalle Muse, chiuso nella sterile riproposizione di motivi ormai abusati e vietati. Eppure, leggendo gli *Altri versi*, non si può non avvertire l'importanza e la freschezza di questa ultima stagione poetica, dove l'ispirazione, ancora feconda, è sorretta da uno stile che, con le parole di Luigi Blasucci, ricrea il «miracolo di una resa sublime» a partire da materiali familiari e quotidiani.

La genesi della raccolta è legata all'invio agli editori critici di vari testi, estratti da Montale dal proprio «magazzino di inediti» e considerati non adatti a figurare insieme alle *Poesie disperse*. All'inizio del 1979 l'autore inizia ad assumere maggiore consapevolezza e decide di dare vita a un ultimo libro, lasciando da parte i vecchi «lapilli», per tornare a comporre. Gli *Altri versi* si vanno così formando per strati, accorpando testi di varia datazione, dai più antichi: *Nixon a Roma* e *Càffaro*, che risalgono rispettivamente al 1969 e al 1972, ai più recenti, come *Poiché la vita fugge...*, scritti a ridosso del 1980, anche se la maggior parte delle poesie

si può collocare nel biennio 1978-1979. Dal processo di allestimento dell'edizione critica, la raccolta senile emerge inattesa, come un «libro nascente», che, secondo la testimonianza di Bettarini, scompagina la situazione di stasi e ordine raggiunta nell'operazione filologica sui testi dagli *Ossi di seppia* al *Quaderno di quattro anni*.

In questo contributo verrà presentata la ricerca svolta presso gli archivi montaliani, finalizzata alla pubblicazione del primo commento integrale agli *Altri versi*, in uscita, entro la fine del 2023, per Agorà&Co. Attraverso l'indagine dei manoscritti e dattiloscritti, alcuni dei quali finora mai censiti, sarà possibile comprendere come lavorava Montale in questa ultima stagione creativa. Le diverse, talora molteplici, stesure rimandano a una ricerca tormentata della «forma definitiva»: idee, ricordi, immagini e sintagmi ritornano ossessivamente alla memoria, desiderosi di trovare posto nella raccolta «testamento».

Una volta acquisita piena consapevolezza del «libro nascente», Montale inizia un lavoro di lima inesausto, sorretto da una volontà d'autore sempre vigile, energica, attenta. I materiali compositivi danno un'immagine fedele dei tentativi di avvicinamento al testo ultimo, della sua dimensione genetica e, come spesso accade, alcune varianti cassate, «cascami» del processo di scrittura, non più utili dal punto di vista dell'autore, risultano invece indispensabili al lettore-critico per chiarire i riferimenti culturali più criptici. La ricerca ha condotto al ritrovamento di un inedito, che verrà mostrato e analizzato.

# ロレンツォ・デ・メディチにおける「人間的観想」と「神の観想」 ——『我がソネットへの注釈』 *Comento de' miei sonetti* 第 21 歌の解釈をめぐって——

林花菜子（京都大学）

本発表では、ロレンツォ・デ・メディチ（1449-1492）の著作、『我がソネットへの注釈』 *Comento de' miei sonetti* を考察対象として取り上げる。1480年3月以降、ロレンツォは自作のソネットに自ら解釈を施し、さらに、序文を付け加えた。作品は、結局未完に終わったものの、その後、数年にわたり推敲が重ねられていった。本作の中核をなすのは、愛に関する思索である。ただその一方で、彼の言語観や哲学的思想、当時の歴史事象に対する見解までもが作品の随所に書きこまれており、本作は、ロレンツォの思想のみならず、15世紀後半のフィレンツェにおける思想的傾向を知るための重要な著作といえる。

本作第21歌のソネットとこれに付随する注釈部では、愛の思念が生み出す甘美さに焦点が当てられる。愛の対象を思い描くこと（*immaginazione*）に関連させて、ロレンツォは、「観想（*contemplazione*）」についての言及を残した。彼によって「観想」は、死すべきものの欲望が形作る虚しい像を観想する「人間的観想（*contemplazione umana*）」と、神の善良さを観想する「神の観想」とに大別された。両者が著しく異なるものであり、さらに、「人間的観想」が不完全であることを認める一方で、ロレンツォは、地上において、それら2つの観想がわずかに類似するという見解を示した。神についての観想でなくとも、不快でないものの観想は、いかなるものについての観想であれ、地上の最上のしあわせとみなされうると彼は述べたのである。Zanato (98-99) の指摘にあるように、ロレンツォと同時代の人文主義者である、マルシーリオ・フィチーノ（1433-1499）やクリストフォロ・ランディーノ（1424-1498）が、専ら「神の観想」について議論し、またその価値を論じたことを考慮すれば、彼らの薫陶を受けたロレンツォが、「神の観想」に劣るはずの「人間的観想」に意義を見出した記述には一考の価値がある。

「観想」に関するロレンツォの見解をたどるならば、1473年に執筆が始められた『至高善について』 *De Summo Bono* 第3章にも、「観想」への言及が見出される。そこでは、「観想的徳」が、「1つ目は地上と自然のものを観想する徳、/2つ目は



天を観想する徳、/3つ目は天上のものを観想する徳 (La prima è contemplare cose terrestre/et naturali, et la seconda il cielo,/la terza è quel che sia superceleste.)」(DSB, III, 120-123) の3つに分けられた上で、3つ目の「天上のものを観想する徳」、すなわち「神的観想」に最も価値が置かれている。『至高善について』との比較から、『我がソネットへの注釈』は、「観想」に関して、「人間的観想」と「神の観想」という区分けがなされている点、さらに、「神の観想」の重視というよりも、むしろ「人間的観想」へ肯定的な評価がなされている点で特異性を有する。

本発表では、『我がソネットへの注釈』第21歌の分析を糸口として、『至高善について』との比較考察を交えつつ、「神の観想」ではなく、あえて「人間的観想」に光を当てたロレンツォの思想を捉え、「観想」への記述を通して表れた彼の思想における揺らぎの意味を解明することを試みる。

#### 引用文献

Lorenzo de' Medici

DSB *De Summo Bono*, in *Tutte le opere*, tomo II, a cura di Paolo Orvieto, Roma, Salerno editrice, 1992, pp. 927-975.

Zanato, T.

1979 *Saggio sul « Commento » di Lorenzo de' Medici* Firenze, Leo S. Olschki Editore.

## 「スペイン人礼拝堂」再考： 14世紀イタリア美術の改悛、救済と復活の諸相

坂口万津子（慶應義塾大学）

本発表はフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院集会室（16世紀以降通称「スペイン人礼拝堂」）壁画を取り上げ、西壁の《聖トマス・アクィナスの勝利と人文学の寓意》のトマスが『知恵の書』とともに描かれる意味を考察する。

集会室はフィレンツェ画家アンドレア・デイ・ボナイウト（活動期間1343年～1377年）のフレスコ画（1366年～1368年）で装飾され、四方の壁には《キリストの受難》《真実の道（戦う地上の教会とドミニコ会の勝利の寓意）》《殉教者聖ペトルス伝》《聖トマス・アクィナスの勝利と人文学の寓意》が描かれる。これら壁画には四分ヴォールトのヴェーラに描かれた新約聖書の主題《復活》《ナヴィチェッラ（舟）》《昇天》《聖霊降臨》との関連や、向かい合う壁同士の主題の呼応をも指摘できる。聖書の主題は教会典礼暦の四旬節と復活節のカレンダーに時系列でならい、北を始点に時計回りに配置される。また《真実の道》の寓意的主題の読解には、神の右の座（観者からは左）に上位のものが描かれるとともに、左から右、上から下に読むことが可能であることも同時に指摘できる。この読解は《真実の道》だけでなく、集会室全体の大きな流れとしてヴェーラと壁にドミニコ会の思想体系を室内に形作っている。

西壁《聖トマス・アクィナスの勝利と人文学の寓意》は、ドミニコ会神学者トマス・アクィナスを中心に美德や聖書の人物、人文学の擬人像などが描かれた寓意画であるが、「トマス・アクィナスの勝利」を表す他の作例ではトマス像が自著『対異教徒大全』の巻頭頁「わたしの口はまことを唱える。わたしの唇は背信を忌むべきこととし」（箴言8章7節）を開く姿で表される傾向にあるのに対し、この集会室のトマスだけが「わたしは祈った。すると悟りが与えられ、願うと知恵の霊が訪れた。」という『知恵の書（7章7節）』の一節を示す特異点が指摘できる。本発表ではその理由を問うため、ドミニコ会設立の趣意に遡り、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院の位置付けと集会室の機能に言及する必要があるだろう。

ドミニコ会は説教者兄弟会の名が示すように、初期の修道院を組織的な学問を修める施設 *studium* としてパリやボローニャなど大学都市に設置し、修道士の神学研究や異端・異教徒反駁を中心とする説教活動を重視した。13世紀後期のサンタ・マリア・ノヴェッラ修道院は、すでにローマ教皇庁の特別神学課程を開設した最初の修道院のひとつとなっている。これはドミニコ会でのサンタ・マリア・ノヴェッラの神学拠点としての重要性と同時に教皇庁との密接な関係を物語るものである。

以上のような背景のもと、14世紀前半のサンタ・マリア・ノヴェッラでは集会室の建設が完成を見ることになる。修道院回廊に面する集会室は基本的機能に、修道士たちが毎日会則を読み黙想し告解する場という特徴を持つ。聖務日課は聖堂の聖歌隊席で行われ、集会室は他に赦しの秘蹟、修練生の入会、教皇やフランス王など貴人の来訪応対、修道会の年次総会・管区会議・修道院会議の議場としての公的面も有し、聖域であると同時に生活域でもありいわば聖俗の分水嶺であった。

この集会室でトマスが異端・異教徒反駁という修道会設立の根幹を担う自著『対異教徒大全』ではなく聖書『知恵の書』を手にしているという事実は、ヴェーラ部に描かれる《聖霊降臨》の主題に相応しい。聖霊が使徒たちに炎の舌となって降り知恵を授けたように、同じ御業によって神の知恵がトマスに降ったことを表すこの主題は、14世紀前半のドミニコ会におけるサンタ・マリア・ノヴェッラが神学拠点として際立った地位にあり、さらには修道会の枠をも超えたローマ教会の知の礎、いわば知の体系を新たに形作ることを高らかに謳いあげる試みであったと言えるだろう。

## アンナ・クリショフと女性選挙権

生木新菜（早稲田大学）

1897年に社会主義者アンナ・クリショフ（Anna Kuliscioff）は、男性と同等の権利を女性労働者に要求し、イタリアにおいても女性選挙権獲得の動きが活発化する。本報告では、女性選挙権を支持したクリショフの主張とその論理と、彼女が社会党に与えた影響を検討する。手がかりとして、クリショフと社会党の創立者で彼女のパートナーでもあるフィリッポ・トゥラーティ（Fillippo Turati）による女性選挙権をめぐる論争「家族論争（Polemica in Famiglia）」をとりあげ、女性選挙権がどのように主張されたかについて考察する。

イタリアの女性活動家らの間では、女性の選挙権取得の要求に対して、大きく2つの考え方に分かれていた。1つ目は、男性に与えられているのと同じ程度に選挙権を要求するアンナ・マリア・モッツォーニ（Anna Maria Mozzoni）ら少数派であるブルジョワ・フェミニズムであり、ブルジョワ階級の女性の権利回復を求め、女性に選挙権を要求した。2つ目は、貧富の差や教育を受けたか否かの差ではなく、全ての女性に権利として無差別に選挙権を要求する、クリショフやマリア・ゴイア（Maria Goia）ら多数派の社会主義者フェミニズムがあった。彼女らはブルジョワ・フェミニズムの階級性に反対し、労働者階級の成長を背景に、女性労働者らの意識改革を目指した。両派は女性に選挙権を与えるという点では共通した意見を持っていたものの、クリショフを中心とする多数派の意見は、権利としての選挙権を全ての女性に要求するものであった。1897年にクリショフは男性と同等の権利を女性労働者に要求し、女性労働者の存在を初めて社会問題として取り上げ、その成果は1902年カルカノ法として公布されたが、実質的内容を伴わなかった。これをきっかけにクリショフは政治的権利を求め、女性選挙権獲得を求める運動へ転じる。クリショフは女性の地位向上のため、実際に政治的権利を持つことの重要性を理解していた。

当初、トゥラーティは女性票が自由主義派を利することを恐れ、女性選挙権のために戦うことを明確に拒否していた。トゥラーティは「女性投票に反対する。それは保守的でカトリック的な選挙民に力を与え、社会主義的な選挙民には力を与えないからである」と明言しており、当時の社会党が女性の選挙権を支持して

いなかったことがわかる。一方で、クリショフとトゥラーティによる女性選挙権をめぐる論争が『社会批判 (Critica Sociale)』誌に掲載された。これは「家族論争 (Polemica in Famiglia)」と呼ばれ、1910年3月22日-4月16日の期間中に、女性選挙権をめぐる両者の率直な意見交換を、クリショフとトゥラーティの署名付きでまとめたものである。ここでクリショフは女性選挙権を擁護し党綱領に盛り込むことを望んでおり、トゥラーティはそれに対し、当初は女性に選挙権を与えることは「有益ではない」と述べているが、彼の意見は終盤にかけて徐々に変化していく。その後、トゥラーティら社会党は、1912年選挙法に女性を含めるよう提案し、男性普通選挙権を完成させるのであれば、女性にも普通選挙権を認める機会にするべきであると言及した。1912年5月8日議会での討論中、トゥラーティは、解剖学的及び生物学的違いだけに関わらず「全てのイタリア人」を含む選挙法を望むと主張した。社会党全体として女性選挙権に賛成票を投じ、クリショフと同様、女性にも平等な権利と機会を与えるべきであると強調した。1912年5月15日議会での討論中、トゥラーティは「社会党は女性選挙権に賛成票を投じます… (中略) …私は首相に、なぜこの改革が500万人の男性に与えられる選挙権よりも危険であるのか、その理由を尋ねたいと思います」と当時の首相ジョヴァンニ・ジョリッティ (Giovanni Giolitti) に明言した。女性選挙権を認める修正案をトゥラーティと共に提案したのは、元首相ソンニーノの他に、ミラベッリや、トレヴェスら社会党外の左派議員らであった。

当初は女性選挙権に慎重な姿勢を示した社会党が女性選挙権賛成に転じたのは、クリショフの影響があったためであろう。その影響がどのようなものであったのか、クリショフの主張と論理と合わせて、女性選挙権がどのように主張されたかについて論じる。

## イタリア語文法記述における統語と意味：「文」をめぐる

土肥篤（東京外国語大学）

20世紀後半、Chomsky（1957）を端緒とする生成文法が言語学において主流の学派になると、イタリア語学の研究者たちはヨーロッパの中でもこれにいち早く反応し、この新しい理論的枠組みを前提としてイタリア語文法の分析に新たな展開をもたらしてきた。一方で、言語学一般における生成文法がそうであったように、こうした枠組みは必ずしも全ての関連研究から受け入れられたわけではない。実際、Renzi et al.（2001）が指摘するように、新しい理論的枠組みを受け入れるのではなく伝統的な学校文法を洗練させる文法研究はその数を減らすことはなく、むしろ1990年代以降に多数刊行された文法書において支配的な傾向であった。現在のイタリア語文法記述は、生成文法が代表するような現代言語学に基づいたものと、伝統的な学校文法に基づいたものとで二分されていると言える。

現代言語学に基づくイタリア語文法は、とりわけ統語論の分野において蓄積されてきた知見を背景にして、しばしば伝統的な文法を批判し、新しい枠組みから文法記述を推し進めてきた。こうした流れの中で見直しが図られた要素の一つに、文法分析における単位の一つとしての「文」fraseがある。伝統文法における文の定義は、その意味機能に注目している点に特徴がある。こうした定義は典型的に、文を「まとまった意味（senso compiuto）」（たとえば、Serianni 1988: 60）を持つ語の連なりとして見る。このような定義は、その指すところが判然としないことに加えて、Gli americani invadono il paese. に対応する L'invasione americana del paese（Salvi & Vanelli 2004: 22）のように動詞句と同様の項構造を持つ名詞句を直観に反して文であると予測してしまう（「まとまった意味」への批判は Graffi 1994: 93-96も参照）。

文（と直観的にみなされるような言語実体）が持つ捉えどころのなさに対して、現代言語学に基づく文法は文の統語的特徴と意味的特徴をはっきりと区別するアプローチをとる。こうしたアプローチは、統語については主語の役割を果たす名詞句（soggetto sintattico）と動詞句を基本とした構造を、意味については主語（soggetto semantico）と述部（predicato）の関係を基盤とした論理関係を、文が持つ特徴として個別に捉える。さらに、統語と意味の間の関係に影響を及ぼす要因

としてしばしばテーマとレーマ、旧情報と新情報といった語用論的考慮を想定している（Andorno 2003 も参照）。

現代言語学に基づいた文法は、こうして文が持つ特徴のうち統語的なものを意味から切り離すことでより説得力のある記述を提供してきた（Vanelli 2010 も参照）。その一方で、こうした統語と意味の分離がどこまで成功をおさめてきたかについては議論の余地があるように思われる。実際、たとえば現代言語学に基づく文法はしばしば動詞を中心とした項構造やそこに現れる必須要素（*elementi nucleari/extranucleari*）といった概念を用いるが、これらは動詞が表す出来事の性質から帰結するのだから、文の意味的特徴である。本発表では、二種類の文法記述の「文」における統語と意味の関係についての立場について整理し、新しい展望について考察してみたい。

#### 引用文献

- Andorno C.  
2003 *La grammatica italiana*, Milano, Bruno Mondadori.
- Graffi G.  
1994 *Sintassi*, Bologna, Il Mulino.
- Renzi L., Salvi G. & Vanelli L.  
2001 *Premessa alla nuova edizione*, in Renzi L., Salvi G. & Vanelli L. (a cura di), *Grande grammatica italiana di consultazione*, 2 ed., Bologna, Il Mulino, 7-16.
- Salvi G. & Vanelli L.  
2004 *Nuova grammatica italiana*, Bologna, Il Mulino.
- Serianni L.  
1988 *Grammatica italiana*, Torino, UTET.
- Vanelli L.  
2010 *Grammatiche dell'italiano e linguistica moderna*, Padova, Unipress.

## Il manoscritto Vat. Lat. 8853 della Biblioteca Apostolica Vaticana: i sonetti ‘persiani’ di un ‘mercante fiorentino’ di fine Cinquecento

AMATO, Lorenzo (東京大学)

Fra i manoscritti della Biblioteca Apostolica Vaticana appartenuti alla biblioteca della famiglia Strozzi si trova il codice Vat. Lat. 8853, contenente una raccolta autografa di 473 poesie revisionate dall'autore fra 1616 e 1619. Gli inventari della Biblioteca Vaticana classificano il libro come scritto da un anonimo fiorentino di fine Cinquecento-inizio Seicento. Il codice non è mai stato descritto in censimenti moderni, e nessuna delle sue poesie è mai stata pubblicata.

L'aspetto più interessante di questa raccolta è la presenza di numerosi sonetti e altre poesie dedicati a luoghi della Persia contemporanea all'autore, e in misura minore del Mediterraneo e dell'India. Il libro è diviso in tre parti: la prima (1r-64v, poesie nn. 1-130), scritta verso la fine del Cinquecento e l'inizio del Seicento, contiene sparse poesie scritte in Persia e in Medio Oriente, ma è più legata ai moduli della poesia fiorentina di fine Cinquecento, con anche una serie di madrigali dedicati alle *Perle*; la seconda (cc. 65r-130r, poesie nn. 131-249) contiene testi già presenti nella prima e in parte nella terza, ma riscritti e revisionati dall'autore; la terza (cc. 141r-252v, poesie nn. 250-473) contiene poesie scritte fra inizio Seicento e gli anni della revisione del libro (1616-1619), e ha piccole sezioni dedicate a sonetti mediterranei e ‘persiani’. Ad esempio gli ultimi sonetti della terza parte sono introdotti dal titolo «Sopra la Città/di Jezd chiamata la prigione/di Alessandro», e poi a mo' di glossa «Q(uesta) città è chiamata anco da Persiani/Arul Schir cioè sposa delle Città»: in effetti Yadz (che il poeta traslittera Jezd), conosciuta come la ‘Sposa del Deserto’, è famosa per la cosiddetta ‘Prigione di Alessandro’, e per i canali sotterranei, che la rendono abitabile e gradevole pur ergendosi in una delle zone più aride del mondo. Nei sonetti il poeta richiama questi aspetti, citando in parte gli storici greci e in parte la tradizione letteraria persiana, e sfrutta le fonti d'acqua come soggetto di ispirazione per cantare, secondo stilemi che richiamano il petrarchismo, le sorgenti e i ‘liquidi cristalli’ che gli ricorderebbero la sua donna.

La raccolta diviene quindi un interessantissimo esperimento poetico e culturale: un intellettuale proveniente dall'ambito del morente Rinascimento fiorentino cerca di aprirsi a un



mondo di idee, lingue e immagini completamente diverso da quello su cui si fondava il petrarchismo italiano. L'anonima raccolta si colloca quindi all'alba di una nuova stagione culturale, quella in cui i nascenti studi di linguistica indo-europea dimostreranno la vicinanza dei mondi indiani e persiani alle radici più profonde del classicismo greco-latino.

Nel mio intervento presenterò il manoscritto, facendone una descrizione secondo gli standard della codicologia. Poi analizzerò la struttura della raccolta, mettendone in evidenza le sezioni più legate ai viaggi dell'Autore, ovvero in particolare i sonetti 'persiani'. Infine, sulla base di documenti già in mio possesso e che mostrerò durante la presentazione, darò un nome a questo 'anonimo fiorentino', ovvero l'Autore delle poesie, dimostrando che fu una figura culturalmente importante nella Firenze e nella Roma di fine Cinquecento e inizio Seicento, e che questo libro di poesie integra lettere e altri documenti già analizzati dai precedenti studiosi.

Con lo studio di questa raccolta poetica e l'identificazione del poeta mi propongo di aggiungere un ulteriore tassello alla ricostruzione della cultura fiorentina tardo-rinascimentale, che proprio con esperimenti come quelli contenuti nel ms. Vat. Lat. 8853 si proponeva come laboratorio della nascente cultura moderna.

## 大会会場

大阪大学 箕面キャンパス 外国語学研究講義棟 501 教室  
〒562-8678 大阪府箕面市船場東 3-5-10

## 控室

同キャンパス 502 教室

## アクセス

電車：大阪モノレール・北大阪急行線 … 千里中央駅下車 北へ徒歩約 25 分

バス：阪急バス 千里中央発

⑦停留所 81, 82, 83, 85, 22 系統

⑪停留所 19, 20 系統

新船場北橋下車 徒歩約 5 分



## 昼食

大会当日、キャンパス内の学食は休業しております。昼食は付近の飲食店をご利用いただくか、お弁当をご持参ください。

### 懇親会のご案内

日時：大会当日 18時から 20時まで

会場：Lei can ting (リー・ツァン・ティン) 箕面市船場東 3-3-1  
(\*箕面キャンパスより徒歩5分)

会費：¥6,000 (学生 4,000 円)

同封の振込用紙で 11 月 3 日 15 時までにお払込ください。

お払込後のキャンセルはご遠慮願います。

\*お支払いいただいていた懇親会費に余剰金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記いたします。

# イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1-1

慶應義塾大学文学部 藤谷道夫研究室内

E-mail: [studiitalici@gmail.com](mailto:studiitalici@gmail.com)

URL: <http://studiit.jp/>